漢詩鑑賞　令和七年三月　　　　　　　　　　　　　　　　　玉井幸久

　賞牡丹　　　　　　　　をす

庭前芍藥妖無格　　の　としてく

池上芙渠淨少情　　の　くしてなし

唯有牡丹眞國色　　　のみのりて

花開時節動京城　　く　をがす

【通釈】

　起句　庭に咲く芍薬の花はつやっぽく美しいが品が無く、

　承句　池に咲くの花はきよらか過ぎてお色気が少ない。

　転句　ただ牡丹のみは、真に国一番の美人ともいうべき美しさ。

　結句　花が開くころともなれば、都長安のまちじゅうを騒がせるのだ。

【語釈】

　牡丹…ボタン属の落葉低木。四～五月頃芳香ある大輪の美しい花をつける。原産

　　　　　は中国北部。山西省の山地に自生していたものが唐の則天武后の頃長安に

　　　　　移植され、貴族邸や寺院の庭で観賞用に栽培されて異常なブームを呼んだ。

　　　　　白居易はその詩「牡丹芳」で「花開き花落つ二十日、一城之人皆狂うがし」　　　　と詠んだ。

　芍藥…ボタン属の多年生植物。花や葉は牡丹に似ている。

　妖…なまめかしい。つやっぽく美しい。

　格…品格。

　芙渠…蓮。

　情…ふぜい。味わい。ここでは女性の色香。

　國色…国中で第一番の美人。

　京城…みやこ。ここでは長安のまち。

【押韻】

　平声　庚韻。情、城、

　起・承句は対句とし、起句は踏み落とし。

【解説】

　劉　禹錫（七七二―八四二）は中唐の詩人。貞元九年（七九三）二十一歳の若さで

　進士及第。柳宗元とは生涯の親友であり、又晩年には白居易と親しく交った。この

　人の詩は此の欄で已に数多く鑑賞している。

　此の詩は、牡丹　芍薬　芙渠をそれぞれ美人になぞらえて品評した面白い作品で

　す。

　先ず「妖として格無し」と評した芍薬については詩経の中で最も恋愛詩の多いこと

　で知られる「鄭風」の詩に、春の野に男を誘い恋を楽しむ女に男が芍薬の花を

　贈る句があってみだらな女を想わせ、又「情少なし」と評した芙渠には楚辞の「離騒」に「芙蓉を集めて裳と為す」の句が有って孤高の人を連想させる。

　これに対し牡丹については、この花の美しさを楊貴妃の美貌になぞらえた李白の

　清平調詞が当時なお記憶に新しかった。

　これらを下敷きとして品評し牡丹を国色と賞しつつも、その花の美に都長安の人

　士が狂う風潮をちくりと揶揄したものと見ることが出来ます。いかにも劉禹錫

　の作らしい味わい深い作品です。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上